



## 産婦人科診療ガイドライン産科編 2023 改訂のポイント

91 巻 1 号に引き続いて、2023 年に改訂となった「産婦人科診療ガイドライン」について特集を組ませていただいた。今回は産科編の特集である。

2008 年に初版が発刊された産科編は、版を重ね 5 回の改訂を経て、産科の日常診療に不可欠な存在となった。診療ガイドラインの目指すところは、エビデンスに基づく標準的医療の実践である。しかし、本ガイドラインはそれにとどまらず、初版の作成当初からコンセンサスと実行可能性を重要視した。これが、本ガイドライン普及の大きな力となったことは間違いない。

2008 年版は正味 193 頁でスタートしたが、2011 年版は 339 頁、2014 年版は 394 頁と CQ (clinical question) の項目数増加とともに、書籍としての厚みを増し、2017 年版では 449 頁のピークに達した。2011～2014 年版の作成段階からは、情報の肥大化が懸念され解説内容の簡潔化が図られるようになり、2020 年版は 384 頁、2023 年版は 405 頁と、情報量の割にコンパクトな書物となり現在に至っている。タブレットなどアプリでガイドラインをご覧の方は、以上の経緯など無用の情報とお思いかもかもしれないが、この簡潔化のプロセスで失われたものは知っておいていただきたい。それは改訂の経緯や背景知識の多くである。

本特集では、新たに加わった CQ や改訂部分に注意を要する CQ を取り上げ、それぞれにお詳しいエキスパートの先生方に、改訂の経緯や背景を含め解説をお願いした。本特集が、「産婦人科診療ガイドライン産科編 2023」の行間を補完し、読者の CQ の理解と診療レベルの向上に、いささかでも貢献できれば幸いである。

(東海大学医学部専門診療学系産婦人科 石本人士)